特集　元気な中小企業訪問記11

第６章
車イス106センチの視線から見えること
――大阪府大阪市　株式会社ミライロ

岩崎　弘之
大阪府中小企業診断協会／滋賀県中小企業診断士協会

会社名	株式会社 ミライロ
代　表	代表取締役社長　垣内　俊哉
資本金	960万円
従業員	51名
所在地	大阪府大阪市淀川区西中島３－８－15
ＴＥＬ	06-6195-7853
ＵＲＬ	http://www.mirairo.co.jp/

目線の高さ，「106センチ」。先天性の病を患い，車いすの視線から日本を見たとき，「ほかの人には見えていないことが見渡せる」と語るのは株式会社ミライロの垣内俊哉社長だ。トレードカラーのオレンジ色のネクタイを身につけ，颯爽と現れた垣内社長は，1989年生まれの今年30歳である。「骨形成不全症」という難病を患い，小学校４年生から車いす生活を余儀なくされた。

幾多の困難と奇跡的な出会いを経て，現在はユニバーサルデザインの総合コンサルティング企業の経営者として51名の社員を率いている。2014年，日本を変える100人として，「日経ビジネス THE100　日本の主役」に選出。今年１月には，テレビ東京「ガイアの夜明け」でも特集された。その劇的な半生と斬新なビジネスモデルが今注目の起業家である。

「バリアバリュー＝障害を価値に変える」，「視点をちょっと変えるだけで，人生は大きく変えられる」と語る垣内社長に，これまでの人生におけるこだわりや工夫，経営姿勢などを伺った。

１．３つのバリア

現在，日本の高齢者約3,460万人，障害者約860万人，ベビーカーに乗る３歳未満の子ども約365万人の合わせて4,600万人超が，移動になんらかの不自由や不安を感じている。「日本の人口の約40％近くを占めるマーケットがそこにある」と垣内社長は言う。

同社は，ユニバーサルデザインという広大な未開拓市場（ブルーオーシャン）を見つけ，設立６年目にして年商２億円を超え，現在も急成長を続けている。垣内社長は，社会における障害者や高齢者，その家族の不便事，不自由事には「環境，意識，情報，３つのバリア」があり，その「３つのバリアを取り払う

ミライロの垣内社長

ことが我々の使命です」と語る。

⑴　環境のバリア

建物や施設を，障害者の目線でバリアフリー，ユニバーサルデザインに変えていく。たとえば，ホテルのバリアフリールームは，手すりが張り巡らされて病室のように感じる空間ばかりだと垣内社長は指摘する。

同社は「こうしたらもっと使いやすいですよ」ということはもちろん，「そこまでお金をかけなくても良いですよ」といった細やかなアドバイスを施設のオーナーや設計者に送っている。

⑵　意識のバリア

今，障害者や高齢者への多くの人や企業の対応は二極化している。「無関心」もしくは「過剰」のどちらかだ。前者は見て見ぬ振り，声すらかけない，無関心を装う。

一方で，必要以上のおせっかい，過剰な対応をしてしまう人もいる。それらを解消すべく，「ユニバーサルマナー」という考え方に則って，同社は高齢者や障害者への接し方を学ぶ，教育研修事業を行っている。

この「ユニバーサルマナー検定」は，アイドルグループ「嵐」の櫻井翔さんの受講で火がつき，これまでの受講企業は延べ400社，受講者は６万人を超えた。2020年までにイオングループの従業員７万人が取得を目指すことも決まっている。

ユニバーサルマナー検定の様子（提供：株式会社ミライロ）

⑶　情報のバリア

「Bmaps（ビーマップ）」というアプリを開発して，本当に障害者，高齢者が欲しい情報を発信する事業を行っている。

たとえば，自治体が作った「バリアフリーマップ」には，段差の有無の記載はあるが，それだけでは意味がない。本当に欲しい情報は，「段差が１段なのか２段以上なのか」という情報だ。

１段なら自分で超えることもできるし，後ろから押してもらえば店に入れるが，２段以上になると，誰か車いすを担ぐ人手が３，４人必要になる。そういった「本当に欲しい情報」を蓄積して発信する事業だ。

ミライロのクレドの１つに「１ミリ，１色，１音にこだわる」がある。１ミリの段差，１色の見え方，１音の聞こえ方にこだわって事業を行っている。

以上，３つのバリアの解消をもとにした事業で同社の業績は，現在好調に推移しているが，これまで垣内社長が歩んで来た人生は決して順風満帆ではなかった。

２．楽しいこと２：辛いこと８の人生

⑴　３回の自殺未遂

「今日までの人生を振り返ると，10のうち，うれしかったこと，楽しかったことを２とすれば，その反対が８の人生でした」と垣内社長は語る。

「あるきたい　いつかみんなと　はしりたい」

垣内社長が幼いころに書いた詩の一節である。治療すれば歩けるようになる。そう信じて手術とリハビリを繰り返したが，17歳の春，主治医からその夢は生涯かなわぬことを告げられた。

「その夜，私は自ら命を絶とうと病院の屋上に向かいました。ところが，私の足では柵を超えることすらできなかった。私は死ぬことさえできないのか，と絶望の淵に立ちました」と当時を振り返る。

⑵ 富松さんとの出会い

初めての自殺未遂の後，何もする気が起こらず，ただベッドの上でぼんやり過ごすだけの毎日が続いたが，それを救ってくれたのが，当時同じ病室に入院していた富松さんというおじいさんだった。気難しそうな人だなと思っていたが，ある日，偶然目が合って，それから少しずつ話すようになった。

その富松さんからかけられた「人生はバネだ。今，君はしんどい時期だろう。それはバネがギュッと縮んでいる時期ということだ。すぐではないが，そのバネはいつかバシッと伸びる。それを信じて今を乗り越えなさい」という言葉が，垣内社長を救ってくれたという。

⑶ 大学３回生で起業

垣内社長は，20歳，立命館大学３回生のときに友人と２人で起業した。歩けない，自殺もできない，では何ができるかと考え抜いた際，出てきた答えが起業だったという。

最初は義肢装具士になりたいと思っていた垣内社長だが，大学に入って最初のアルバイト先で，社長からいきなり「お前，営業をやれ」と命じられた。車いすのハンディキャップを背負いながら，何度も顧客を訪問した結果，顔を覚えられ，数ヵ月もたたないうちに，その会社で営業成績ナンバーワンになった。

ある日，社長から「歩けないことに胸を張れ。お客様に覚えてもらえているならば，それは営業マンとして大きな強みだ」と言葉をかけられた。この瞬間，「歩けないからこそできることがある」と初めて気づき，起業の決意を固めたという。

そして2010年６月２日，「株式会社ミライロ」はスタートした。しかし，現実は厳しく，１期目の売上は120万円。寝ずに仕事をし，教科書をオークションで売って生活費をかき集め，朝昼晩，豆乳や野菜ジュースで乗り切った。

⑷ 応援者が現れる

そんな苦しい中，垣内社長を救ってくれた２人の恩人との出会いがあった。

１人目は，当時の摂津水都信用金庫（現・北おおさか信用金庫）梅田支店の支店長だ。資金繰りが必要で，ありとあらゆる銀行に融資のお願いに行ったが，１年目の売上を見たら，どこの銀行も当然門前払いだった。

まず，融資申込書の代表者の生年月日を書く欄に「平成」がなかったという。当時，平成生まれの起業家はごくわずかで，「そんなに若いならだめだ」となるのが普通だった。しかし摂津水都信用金庫へ行った際，垣内社長が「記入欄がないのですが」と言ったら，慌てて支店長が出てきて「初めての平成案件です。ぜひ，うちでお願いします」と融資を承認してくれたという。若き起業家の情熱が伝わったからだろうが，垣内社長は「大阪の人情，ノリに救われました」と当時を振り返る。

２人目は，IT 企業「シナジーマーケティング株式会社」の谷井等社長だ。谷井社長との出会いは，まさに運命的だった。ミライロを立ち上げた後，「CRM」という顧客管理ツールを導入するため，数社に資料請求をした際，思ってもいなかったが，谷井社長本人から「会いたい」との返信が直接来たという。１日に何百通も来るメールの中から偶然目にとまり，ミライロの事業に興味を持ったのだ。

当時，垣内社長は入院中だったが，急いで退院し，すぐに駆けつけたという。「最初の頃の大きなクライアントは，ほとんど谷井社長が引き合わせてくれました。本当にさまざまな方が気にかけてくれて，ご縁がつながって会社が成長してきました」と垣内社長は語る。

３．最高の準備

垣内社長に，会社を経営していくうえで，特にこだわってきたことを伺った。

「最高の準備こそが何事においても成功の秘訣である」

逆に言えば，「アドリブでいけると思ったときが失敗のもとである」と垣内社長は言う。自分は体に障害があり，不安症であることが根幹にある。たとえばトイレ，エレベータとさまざまなバリアが多すぎて，それを乗り越えるにはどうしたらよいだろうと常に１手先，10手先，100手先を考える習慣が自然に身についたという。

あるビジネスコンテストで，これまでで最高の8,000人を武道館に集めプレゼンをしたときも，２～３ヵ月前から準備し，一言一句，ジェスチャー，体の動き，顔の向きに至るまで，完璧な７分半を演出することができたから，グランプリを受賞できたという。

「これまで多くの後悔があったからこそ，それを次に生かそうという生き方を続けてきたことが良かった。そして最高の準備をしたからこそ，最後は運次第と開き直ることができたと思います」と垣内社長は語る。

ビジネスコンテストで見事グランプリを受賞（提供：株式会社ミライロ）

４．障害を持つすべての人にスポットを

垣内社長は一昨年，「2020東京オリンピック・パラリンピック」競技大会組織委員会アドバイザーに就任した。

当大会に臨むにあたり，垣内社長が「使命」と感じていることがある。障害者スポーツにスポットが当たること自体は望ましい。ただ，どこかに光が当たればどこかに影が生まれる。「我々は光の当たらない人にも目を向けなければならない」と垣内社長は言う。

今，障害者雇用が活発だが，それは障害者スポーツの競技者に限定されがちだ。垣内社長は，残された800日の間に「アートや芸術，文化，さまざまなところで輝いている障害者にもしっかりとスポットを当てていく」と抱負を語った。

５．おわりに

垣内社長の今後の人生における夢について語ってもらった。

2013年４月，垣内社長は定期的なメンテナンスのつもりで受けた手術後に，自発呼吸ができなくなり，そのまま「５分間の心肺停止」に陥った。３日間の昏睡状態の後，奇跡的に目を覚ましたが，そのときから改めて残された時間を意識するようになったという。

「求める未来は，これから家庭を築き，子を授かるとき，子どもが死にたいと思わなくてもよい未来です。浅はかなことですが，私はこれまでに３回，自ら命を絶とうとした。しかしこれからは，辛いから死にたいではなく，『障害があったからこそこれだけ多くの人に恵まれた』と思える未来にするため，残された時間を使っていきたい」

「『人生の長さは変えられないが幅は変えられる』ということを，世界中の障害のある人に伝えることが私の使命です。そして死ぬ前に自分の人生が，辛いこと４：楽しいこと６の人生だったと思えたら幸せです」と目を輝かせて語ってくれた垣内社長の挑戦は，これからも続いていく。

岩崎　弘之
（いわさき　ひろゆき）
大学卒業後，株式会社日本旅行に入社。「お客様の期待を超える満足を提供する」をモットーに営業に邁進。29年間の旅行業経験を強みに，2018年独立。観光業への営業支援，ホスピタリティマインドを持つ人材の育成を得意とする。兵庫県立大学大学院経営研究科（MBA）修了。